韓国併合百年と「在日」

新潮選書

著者:金賛汀

210781136　木下小夏

はじめに

「韓国併合条約の締結」

ア.1910年8月22日　竜山地区で日本軍による王宮の包囲

　→皇族、閣僚による御前会議の開催

イ.韓国併合条約締結議題の審議

　→恐怖感、無力感によって満場一致の賛成

ウ.日本政府による優遇に期待

　→韓国民からの“売国奴”という認識

Ⅰ植民地支配の幕開けと在日

1.在日朝鮮人の誕生日

ア.併合以前に渡来の人々

a.韓国併合条約の締結期　→　来日朝鮮人は約1000名

敗戦直前　→　約200万名

b.韓国併合後、出稼ぎ者や留学生、戦時動員の連行者

c.在日朝鮮人は　“韓国併合の落とし子”

Ⅰ　植民地支配の幕開けと在日

イ.反日感情ばかりの留学生たち

a.1876年に朝日修好条規、朝日貿易規制の締結

→日本と朝鮮の往来の自由化

b.併合以降は在日労働者の割合増加

Ⅰ　植民地支配の幕開けと在日

2.亡国の悲哀と独立への渇望

ア.留学生たちの独立運動

a.”大韓興学会“の強制解散

b.“留学生団体“の設立

→学生以外も含めたすべての反日独立運動の監視

c.啓蒙活動

イ.2.8独立宣言と3.1独立運動

→日本の圧倒的な武力での鎮圧

Ⅰ　植民地支配の幕開けと在日

ウ.日本のいたるところに朝鮮部落

a.1960年初頭まで、朝鮮人多住地域の存在

→劣悪な環境下

b.日本人の偏見・迫害からの逃避

c.民族文化の温存

Ⅰ　植民地支配の幕開けと在日

3 .戦時体制下の在日社会

a.世界恐慌の社会不安のもとでも移住民の増大

→日本は国家的な総合対策の必要性

b.1934年、“朝鮮人移住対策ノ件”による渡航者の減少

→朝鮮人の渡航阻止対策、在日対策の二本柱

c.日中戦争での朝鮮からの戦時動員

→在日人口の急増

Ⅱ　植民地支配の終焉と在日社会

1.新国家建設の渇望と怒涛の帰還熱

a.1945年、日本の敗北による朝鮮植民地支配の解放

b.虐待を問われることへの恐怖、帰国の後押し

c.戦時動員以外の一般在日も帰国希望者増大

→帰国後の困窮者の噂により帰還に歯止め

Ⅱ　植民地支配の終焉と在日社会

2 .祖国志向の在日社会

a.多くの戦時動員者の帰還

→対して故郷のない一般在日は帰国の見合わせ

b.1946年、SCAP（連合国軍最高司令官）による帰還事業の打ち切り

→“在日朝鮮人は非日本人”という措置からの除外

c.在日は“日本国籍保有者”

→戸籍などざまざまな面で矛盾

Ⅱ　植民地支配の終焉と在日社会

3 .冷戦の激化と厳しさ増大の生活

a.ドッチ・ラインによる在日社会への大打撃

→多くの同胞零細企業の倒産

b.失業者の生活の困窮

Ⅱ　植民地支配の終焉と在日社会

４.朝鮮戦争の尖兵

a.南北の分断による在日社会の抗争激化

b.在日は北朝鮮を支持

→北朝鮮の在日支援の約束が背景

c.北朝鮮帰還事業の結果：悲惨

→生活的な相違点による現地人との共同生活の困窮

d.帰還志向者の減少と日本定住の自覚

Ⅱ　植民地支配の終焉と在日社会

5 .定住の進展と在日の新たなる動き

a.各地に不法占拠などの朝鮮人多住生活地域の存在

→1960年代に減少

b.高度経済成長による在日の就労機会の増加

c.在日の民族意識の希薄、日本人化の進行

Ⅱ　植民地支配の終焉と在日社会

6.共生社会という道筋

a.在日のの本国籍の取得

→社会的、歴史的背景

b.帰化後の在日も日本社会から疎外

→“新日本人”

c.“日本国籍取得者と在日”という問題は極めて重要なテーマ

おわりに

在日社会における共生社会の実現の提示、日本社会の繁栄と建設に寄与
→さらなる在日社会の新しい指標